

News Letter

文部科学省 ダイバーシティ研究環境実現
イニシアティブ事業 (特色型)

■発行

国立大学法人群馬大学
男女共同参画推進室〒 371-8510
群馬県前橋市荒牧町 4-2
TEL:027-220-7146
FAX:027-220-7143
mail:kyodo-sankaku@jimu.gunma-u.ac.jp
HP:https://kyodo-sankaku.gunma-u.ac.jp/2019.11
vol.21大学幹部の皆様との
全学ランチミーティング開催

令和元年6月20日に荒牧キャンパス中会議室において、ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ事業の一環である全学ランチミーティングを開催致しました。当日は、本多理事をはじめ多くの役員の皆様にご参加いただきました。そして女性研究者のみならず、多くの男性教職員、大学院生も加わり、総勢36名、立食式で軽食を取りながら交流を深めました。参加者からは、「普段交流の少ない他部門の方と知り合えてよかった」、「時間が足りなかった。とはいえ、忙しい中なので短時間でも交流できてよかった」というようなご意見をいただきました。他部門の研究・教育、環境、業務に関する情報交換は極めて貴重なチャンスといえます。今後も多くの研究者、職員の方々が遠慮なく話せる和やかな空間づくりを考えてまいりたいと思います。

医学系研究科男女共同参画推進委員会
科研費セミナー開催

令和元年7月17日に昭和キャンパス臨床大講堂にて医学系研究科男女共同参画推進委員会主催の科研費セミナーが開催されました。本委員会は群馬大学が文部科学省科学技術人材育成費補助事業『ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ (特色型)』に採択されたことを受け、重点学部として昨年3月に発足しました。今回はその活動の一環として、スキルアップ、特に科研費獲得に特化したセミナーを実施しました。講師として、科研費に関する多数のベストセラーを出版されている久留米大学分子生命科学研究所教授 児島将康先生をお招きし、『科研費獲得の方法とコツ：申請書作成の重要チェックポイント10』と題し、お話をいただきました。セミナーでは、科研費についての概要から近年の傾向、申請書の基本的な書き方から応用的なテクニックまで幅広くご教授いただきました。なお、当日は、昭和キャンパスのほかに荒牧、桐生、太田の各キャンパスにも遠隔中継が行われ、全キャンパスで合計118名の参加者を集め、大盛況のうちに終了しました。



大学幹部 FD セミナー

「大学に求められるダイバーシティとはなにか?—男性学の知見から—」開催

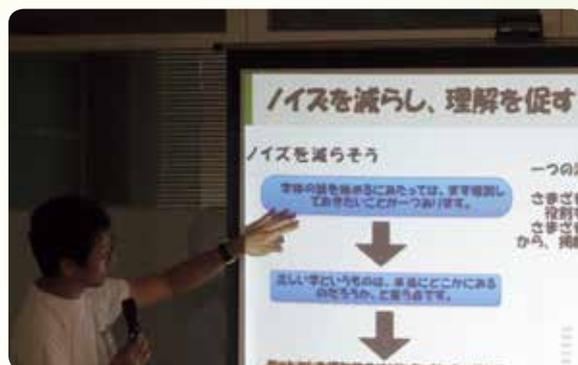
令和元年5月23日、アトリウムラウンジを会場に、京都産業大学ダイバーシティ推進室 室長の伊藤公雄氏を招いて「大学に求められるダイバーシティとはなにか?—男性学の知見から—」をテーマに大学幹部セミナーを開催しました。大学幹部10名を含む19名（うち男性14名）が参加しました。

伊藤公雄氏は、男性学の知見に基づき、日本社会に根付くジェンダーの問題を提起する傍ら、京都大学の男女共同参画に長年尽力されてこられました。講演では、社会学的な視点から日本と世界の中での日本の現状と課題に触れ、ジェンダーの平等が経済の安定・成長に関わっているとデータを示し、詳しく説明されました。他者をモニタリングしがちな「協調型集団主義」から、それぞれの個性を役割分担する「協調型集団主義」へと変わっていく必要性を訴えられました。二つのG、Gender& Generation、ジェンダー平等と次世代育成の新たな課題として、性の多様性に敏感な視点の重要性を述べられ、締めくくられました。



第9回研究力アップ講座開催

9月12日に桐生キャンパスと荒牧キャンパスで第9回研究力アップ講座を開催しました。今回は既にこの講座に何度かご登壇いただいている「オフィス伝わる」主催の高橋佑磨先生（千葉大学理学部・大学院理学研究院特任助教）に、「脱自己流!!学生&研究者が押さえておきたいデザインの基本ルール」と題したセミナーを行っていただきました。第一部ではフォントの選び方や文字の配置などのデザインの基本を、第二部では科研費の申請書を見やすくするポイントについて具体的にお話いただきました。桐生42名、荒牧40名、計82人の教職員・学生にご参加いただき、「漠然と感じていたことをはっきりルール化できた」「すぐ活用できる工夫を学べた」「何回聞いても目からウロコの講座である」「さっそく実践したい」など大変ご好評でした。9回を重ねた本講座は、学生から教職員まで学内に定着した感があります。今回参加者の皆様からいただいたアンケートにお応えする形で、今後もパワーアップした講座をお届けしたいと思います。



理工学府FDセミナー開催

6月21日（金）、理工学府においてFDセミナー「ご存知ですか？“妊活”のこと～イクボスとしての対処法」を開催し、大学幹部を含む20名の教職員が参加いたしました。講師には、群馬県立県民健康科学大学看護学部講師・林はるみ先生をお招きし、ご自身の研究や医療現場でのご経験などから、妊活、不妊治療の現状、夫婦の苦悩、イクボスとしての対応について、分かり易くお話いただきました。

アンケートでは「普段あまり意識することのない不妊治療について、わかりやすく教えていただき大変勉強になった。不妊治療をしている方が思ったより多くて驚いた」「“妊活”の詳しい事がよくわかった。しかしとても複雑で難しい問題であると感じた」「当事者の方は非常に苦しい思いをされている場合もあると知った。何らかの力になってあげることができれば…」等の感想が寄せられました。今後も、このような職場環境改善のための意識啓発イベントを計画していきたいと考えております。



Su-soku 瞑想と逐次学習の併用が 認知機能に与える影響の解明

保健学研究科リハビリテーション学 助教 下田 佳央莉

自分の呼吸を「1、2、3、4…」と数えることで、精神の安定をはかるSu-soku瞑想がある。本研究は、Su-soku瞑想と認知機能指向型の運動学習（逐次学習）の併用が、認知機能に与える影響を解明することを目標としている。Su-soku瞑想は、注意機能の一つであるworking memoryを向上させ、前頭前野を有意に活動させることが確認されている（申請者ら、投稿中）。そして逐次学習の前に瞑想を行うと、その学習効果は高まることが示されている（Chan RW, 2017）。

しかし、我々は瞑想がもたらす効果は対象者にとって一様ではなく、パーソナリティ等の特性に影響を受けると考えている。これまで、パーソナリティを考慮に入れた瞑想の効果検証はあまり行われていない。そのため、我々は現在、健常成人を対象とし、Su-soku瞑想とRandom Thinking（様々なことに思いを馳せている状態、RT）が気分や覚醒度、認知機能に与える影響を、パーソナリティを考慮に入れて検討している。現在までの実験の結果、Su-soku瞑想はRTよりもネガティブな気分を軽減させやすく、神経症性傾向のパーソナリティが強い人ほど、その効果は大きいことが分かった。

今後も研究を継続させ、その成果を認知機能向上のための、根拠のあるリハビリテーション法の開発に繋げたい。

平成30年度共同研究促進事業 活動報告【A型】

共同研究促進事業【A型】（大型の共同研究や受託研究のプロジェクトリーダーとなる研究を提案する）の昨年度採択者の活動報告をシリーズでご紹介します

横山保健学研究科長インタビュー ～男女共同参画を語る～

インタビューー **横山 知行** 保健学研究科長

インタビューア **嶋田 淳子** 保健学研究科教授・
男女共同参画推進室副室長

長安めぐみ 男女共同参画推進室副室長



長安：保健学科は女性が活躍する学部として、群大の柱だと思いますが。

横山：保健学科は女性教員が半数を占めており、今後も看護学科を中心として人数の増減はさほどないと思います。ですので、人数だけを見れば目標はクリアしていますが、逆に言う現状に甘えているというか、意識していない。つまり、保健学科は性別や状況に関係なく同様に仕事をこなすことが当然かようになっていて、何でも平等なのが本当にそれでいいのかと改めて考えさせられます。

長安：子育て中の方もいれば、独身の方もいらっしゃるの、バランスを取るのが難しい面もありますよね。

横山：女性が少なければ、周囲も意識するきっかけになると思いますが、保健学科のように女性が多いと、そういった配慮ができないといえますか、未婚既婚に関係なく一緒にやって当然でしょうという雰囲気があると思っています。今は定員削減で、教員の負担が増えて休みが非常に取りにくい。産休や育休の制度はあるけれども、取りたくても取りにくいという状況が出てきていますね。各教員が自分しかできない仕事を抱えてしまっているの、その人が抜けると替わりができない。更に教員の人数も減って大変厳しい。抜けた分の人員を補充しないと、これ以上の仕事量をこなすのは無理ですね。そこを理解してもらわないと。休みは取っていいけれど、後は自分たちでやってくださいと言われてしまうと組織も困るし、休みを取る方もやはり遠慮します。休暇を取れる仕組みがあるにも関わらず、使えないようでは困ります。



長安：群大は産休育休時の代替教員の雇用は可能ですがすべての仕事を代わりにお願いすることは難しいようです。

横山：一人ひとりの教員の負担も増えているので、休んだ先生の分がある程度はカバーできるような仕組みは作って欲しい。

代替の方をしっかりと入れて、業務がきちんと回るように仕組みを作りができると組織としてもやり易いですよね。

嶋田：保健学科全体は女性教員が半数いますが、教授は圧倒的に男性が多い。

横山：看護に限らず検査やりハビリもそうですが、講師や助教クラスは非常に女性が多い。ところが、准教授以上になると男性が多いのは、若い先生が上位職にアプライできる機会が少ないからだと思います。教授には医系教員の男性が多い状況になってしまっている。そのあたりを改善する必要があると思います。

長安：検査やりハビリの分野でも女性が上位職になって欲しいと思います。

横山：そのとおりですね。ただ、検査やりハビリは大学院ができて間もないので、博士を持っている人が少ない。だから、教育のできる人材が乏しいですね。今後は、臨床検査技師などで教育もできる人がアプライしてくれると、女性の教員も増えると思います。今は公募しても、なかなか応募してもらえない。現場を経験して、大学院で博士号を取得した卒業生が何年後には上位職になってくれればと期待しています。

嶋田：女性教員や学生に期待することはありますか。

横山：私はずっと医師の世界にいて、男性の視点でしか見られないので、女性の視点を入れることが大切です。保健学科、特に看護は女性の教員と学生が多いので、女性の観点や視点を汲み上げることは大変重要だと思います。

長安：LGBTの方も含めて今までにない多様な視点が求められていますね。

横山：大学全体としては、もっと人数を増やすべくいろいろ努力をする必要がありますね。

嶋田：本日はありがとうございました。